

副詞と接語とV2と

阿部幸一

1. 序論

従来、英語史における動詞第二位置現象 (Verb Second, V2) の消失と、接語 (動詞に隣接した代名詞) の消失については多くの文献で研究されてきた。しかし、副詞との関係によって、V2や接語の消失を説明するものは見られなかった。Chomsky (1995) 及びCosta (2004) では、副詞が接語や目的語との類似の扱いを受ける可能性を示唆している。¹ それらを受けて、接語と副詞の関係を明らかにすることによって、従来よりもより深くV2をめぐる中英語 (Middle English, ME) における歴史的变化を捉えることができることを示す。

次のような構成で、考えを進める。1) 従来V2現象や接語に関する論文の幾つかを取り上げ、その問題点を指摘する。2) 接語と副詞の関係を考えることにより、従来よりもより深い考察ができることを示す。3) その過程で、V2構造と接語構造との関係についても考察し、中英語期におけるV2と接語の消失の関係を統一的に説明する。

2. 従来 of 分析とその問題点

2.1 Kemenade (1987)

おそらくV2現象と接語との関係について、初めて明確に触れたのは、Kemenade (1987) であると思われる。そこでは、中英語期に起こった三つの変化として、次のことが列挙されている。

- (1) a. OVからVOへの変化(1200年頃までに完了)
 b. V2の消失(1400年頃までに完了)
 c. 接語化の消失
 i) 目的語の接語化は1200年頃になって減少し、1400年頃までに絶滅
 (1200年頃にVOへの変化が起こったため)
 ii) 主語の接語化は、1400年頃まで残る(特に南部で)
 (1400年頃におけるV2の消失と関与)

Kemenadeの接語の定義は次のようになっている。

- (2) a. 接語は、A'位置を占める
 b. 接語は格を吸収する
 c. 接語は θ 役割を吸収しない
 d. OEにはダミーの格標識は存在しない (Kemenade (1987, p. 134))

接語は、その主要部によって下位範疇化されている適切なNP位置と同一指示を受ける。そのNP位置は、 θ 役割を保持しており、接語自体は格素性を持っていて、他の接語位置(V'やINFL)やComp位置へ移動できるとしている。

Kemenadeの定義によれば、動詞によってc統御される位置に生じる代名詞は、接語ではないと判断される。したがって、目的語接語が現れることができるのは、動詞句の左端、いわゆるWackernagel position(後述)と考えられる。他方、主語接語は、完全名詞句が現れる通常的位置([Spec, TP])には許されないので、Comp位置に生成されるとしている。以上の定義から、移動された代名詞が接語ということになる。

主語接語と目的語接語の消失に関して、Kemenadeはより詳しく論じている。1200年頃に、英語の構造がSOVからSVOへ変化するのに伴い、名詞の形態的区別が減少し、またVP内での格形態素(斜格)の消失が起こり、目的語接語が消失したと仮定している。一方、1400年頃にV2が消失して、動詞の形態的区別が減少し、それに対応してAGRの形態的特徴がなくなったために、COMP内の主語接語も消失したと仮定している。

Kemenadeにおける説明では、V2と接語の消失が関連していることが表明されているものの、その理論的な説明がまだ不十分のように思われる。

2.2 Trips (2002)

従来良く知られている事実は、OEにおいては、V2に関して、主節（ルート節）では、代名詞主語（＝主語接語：Pro-subject）と完全名詞主語（NP-subject）との違いが見られたことである。

(3) a. XP-V-NP-subject (V2)

b. XP-Pro-subject-V (V3)

しかし、埋め込み節（従属節，非ルート節）では、主語接語と完全名詞主語の違いは見られない。

(4) CP-NP-subject/Pro-subject-V (V3)

ところが、ME期に入ると、南部方言ではOEのままのパターンが維持されるが、北部では、V2に対する主語接語と完全名詞主語との対比がなくなる。

(5) 北部方言：ルート節（主語接語と完全名詞主語が同じ扱いを受ける）

a. XP-V-NP-subject/Pro-subject (V2)

非ルート節では、OEと同様。

b. CP-NP-subject/Pro-subject-V (V3)

この違いを説明するために、Tripsは言語接触という考えを導入する。すなわち、北部では、V2の強いステータスを持ち、たぶん明確な接語を持たないスカンジナビア人達との言語接触により、主節でも主語接語と完全名詞主語との区別がなくなったと仮定される。しかし、この変化は北部特有のものであると考えられる。なぜなら、Miyashita (2004) の指摘にあるように、南部では北部とは逆の方向で、完全名詞主語と主語接語が同列化したと考えられるからである。

(6) 南部方言：

EME: SUBJ_{FN}: V2/SUBJ_{PPRN}: V3

LME: SUBJ_{FN}: V3/SUBJ_{PPRN}: V3 (Miyashita (2004, p. 113))

（ここで、EMEは初期中英語を示し、LMEは後期中英語を示す。SUBJ_{FN}は完全名詞主語を表し、SUBJ_{PPRN}は主語接語を表す）

Tripsの指摘する北部での変化は、スカンジナビア人達との接触の多かった初期中英語の時期であり、それ以降の近代英語までの文献が北部では欠落して

いるので、その間にどういった変化が北部で起こったか不明である。一方、南部での後期中英語の変化が、その後主流となり、英国全土に広がったと仮定される。

ここでの重要な問題は、一見すると、初期中英語の北部におけるV2に関わる、主語接語と完全主語名詞の同列化と、後期中英語の南部におけるV2消失に関わる、主語接語と完全主語名詞の同列化は、同じように見えるが、内容は異なることである。

つまり、北部では、より強力にV2が進んだため、(3)のようにOEの主節で見られていた主語接語と完全主語名詞の位置上の区別が、(5a)のように主語接語と完全主語名詞の位置上の区別がなくなって、共に動詞の後に来ていることである。その限りで観察するならば、(北部初期中英語においては)主語接語が完全名詞主語の現れる位置へ降りて来たように見える。

一方、南部における変化は、同じく主語接語と完全主語名詞の位置上の区別がなくなったといっても、ここではV2消失が関わっているのだから、いわば、この構造では完全主語名詞が主語接語の現れる位置へ上昇しているように見える。しかし、V2現象と接語化を考えた場合、学習者がV2が消失したと判断する構造は、完全主語名詞と動詞との関係である。

すなわち、接語は本来動詞に付加されているので、一見するとV3のように見えるような構造、すなわちSUBJ_{PPRN}: V3は、Miyashita (2004)ではEMEでもLMEでも同じ扱いがされているが、接語が動詞に付加されているという観点からみると、これはTopic - [Pro-subject + V] となって、V2を保持している可能性と、接語が名詞と同化して、Topic - Pro-subject - VのようにV3を示している可能性がある。

本当にV2がなくなったことを示すためには、SUBJ_{FN}: V3 = Topic - NP-subject - Vの存在が重要となる。完全主語名詞は動詞に付加しないので、この構文は明らかに脱V2化を示していて、これこそが後期中英語の南部で起こった変化である。

したがって、Trips (2002)では、言語接触といった、社会言語学的な原理を用いて、初期中英語の北部における、いわばV2の復活とそれに伴う接語の

変化を説明しているものの、その後のノルマン征服等によって、南部方言では、V2が消失し、それと共に接語が消失していったわけであるが、なぜ南部方言が北部方言のような言語接触を受けず、南部独自の変化をして、またそれが英語史において主流になっていったのか、こちらの方を説明すべきである。

2.3 Platzack (1995)

Platzack (1995) は、V2をめぐる英語と仏語の類似性および相違性に着目して、V2とは、 C^0 にある定性素性[+F]を満足させるために、動詞を C^0 に移動させる操作と仮定し、英語や仏語でV2が消失したのは、定性素性[+F]が I^0 に生成されるようになったためであるとしている。その後、英語はさらにAgrが弱体化することにより、動詞移動がなくなり、[+F]を持つ I^0 を満足するために、助動詞やdo-supportやInf-loweringなどが生じたと仮定している。一方、仏語の場合には、V2がなくなっても、Agrが強いために、動詞移動は存続して、null subjectが主節ばかりでなく、従属節でも起こるようになると仮定している。

より詳しいV2の消失に関する議論では、トピックと時制動詞の間に来る代名詞主語(=主語接語)の曖昧な構造の存在によって支持されるとしている。統語的变化が起こるためには、言語の歴史的発展のある段階で、若い世代が、古い世代とは異なった解釈を持つ構造が必要であるとして、(7)の例に対する(8a, b)のような構造的曖昧性を仮定している。

(7) Certis **pei** ben opyn foolis

Certainly they are open fools (Platzack (1995, p. 209))

(8) a. Certis [_{IP} **pei**, [_I ben]] [_{VP} e_i [_V e_j] opyn foolis]

b. Certis [_C **pei**, + ben]_k [_{IP} e [_I e_k][_{VP} e_i [_V e_j] opyn foolis]]

(Platzack (1995, p. 209))

ここでは弱形の代名詞(接語)の**pei**が、通常の主語と同じ位置([Spec, IP])にある場合(8a)と、時制動詞に接語化されている場合(8b)が仮定される。(8b)は、V2文法を持つ人によって生成されたもの。(8a)は、V2文法を持たない、代名詞を接語として分析しない人によって生成されたもの。こういった構造的な曖昧性の中で、学習者である子供は、V2を示す積極的な例(Topic -

V - NP) に遭遇する機会が減るにつれて、V2パラメータのマイナスの価を選択して、定性がI⁰にあるとする (8a) の構造を獲得していったと仮定している。

Platzackの説明では、V2における変化を、定性素性 [+F] がC⁰からI⁰への変化と仮定している点で注目に値するが、なぜこの構造的変化が起こったのかに関して、より明確な理論的説明が必要と思われる。

2.4 Miyashita (2004, 2005)

Miyashitaは、ME期における代名詞目的語の持つ接語的な振る舞いに着目し、phase理論の立場から、接語の持つ素性として_uClを仮定し、この素性を持つ要素 (D^{0max}) が接語化される主要部との照合関係により、その統語的位置が決定されると仮定している。例えば、主語接語と目的語接語を含む文について、次のようなかなり複雑な派生を仮定している。(一部派生省略)

(9) a. Merger of Subj_{PPRN} and Obj_{PPRN} Movement to Spec *v**P

$$[_{v^*P} \text{Obj}_{PPRN} \{ \phi / \pi \text{Case} / u \text{Cl} \} [_{v^*} \text{Subj}_{PPRN} \{ \phi / u \text{Case} / u \text{Cl} \} [_{v^*} v^* \{ \text{EPP} \} [_{VP} t_{Obj} \text{V...}]]]]$$

b. Subj_{PPRN} Movement to Spec TP

$$[_{TP} \text{Subj}_{PPRN} \{ \phi / \pi \text{Case} / u \text{Cl} \} [_{T'} T \{ \text{EPP} \} [_{AUXP} \text{AUX} [_{v^*P} \text{Obj}_{PPRN} \{ \phi / \pi \text{Case} / u \text{Cl} \} [_{v^*} t_{Subj} [_{v^*} v^* [_{VP} t_{Obj} \text{V...}]]]]]]]]$$

c. Subj_{PPRN}/Obj_{PPRN} Encliticization to C

$$[_{CP} C + \text{Subj}_{PPRN} \{ \phi / \pi \text{Case} / \pi \text{Cl} \} + \text{Obj}_{PPRN} \{ \phi / \pi \text{Case} / \pi \text{Cl} \} [_{FinP} \acute{p}at [_{TP} t_{Subj} [_{T'} \text{AUX-T} [_{AUXP} t_{Aux} [_{v^*P} t_{Obj} \dots \text{V...}]]]]]]]]$$

d. Fin-to-C Movement

$$[_{CP} \acute{p}at - C + \text{Subj}_{PPRN} + \text{Obj}_{PPRN} [_{FinP} t_{Fin} [_{TP} t_{Subj} [_{T'} \text{AUX-T} [_{AUXP} t_{AUX} \dots \text{V...}]]]]]]$$

$[_{v^*P} t_{Obj} [_{v^*} t_{Subj} [_{v^*} v^* [_{v^*P} t_{Obj} \dots V\dots]]]]$ (Miyashita (2004, pp. 131))

この構造では、VP内で生成された目的語接語が、動詞と照合し、 v^* のEPP素性を満たすために、その指定辞位置に移動する。一方、 v^*P の指定辞位置に生成された主語接語は、TのEPP素性を満たすために、その指定辞位置に行く。その後、Tへの(Aux) V移動が起こり、さらに主語接語と目的語接語は共にCへ行き、Fin-to-C Movementが起こり、最終的には、接語が動詞(Aux)の前に来る構造が生み出される。

またMiyashitaによると、ME期に、目的語接語が消失すると共に、V移動(V-to-Fin)も消失する構造として、次のものを考えている。

(10) a. $[_{CP} \text{Topic} [_{C'} C [_{FinP} V\text{-T-}v^*\text{-Fin} [_{TP} \text{Subj}_{FN} [_{T'} t_T [_{v^*P} t_{Subj} [_{v^*} t_{v^*} [_{VP} \dots t_V \dots]]]]]]]]]]]]$ (EME)

b. $[_{CP} \text{Topic} [_{C'} C [_{FinP} \text{Fin} [_{TP} \text{Subj}_{FN} [_{T'} V\text{-T-}v^* [_{v^*P} t_{Subj} [_{v^*} t_{v^*} [_{VP} \dots t_V \dots]]]]]]]]]]]]$ (LME) (Miyashita (2004, pp. 136))

この初期中英語(EME)から後期中英語(LME)への変化は、V移動がなくなることによって、動詞が第二位置を占めなくなったことを表し、接語がなくなったのは、単に接語を要求する原理(μ Cl requirement)がなくなったことによると考えている。Miyashita (2004, 2005)の説明では、接語に対して μ Clという、その統語的特徴が不明な、いわばその場限りの恣意的な素性を仮定して、接語が消失したのは、単にその素性が動詞によって照合されなくなったという、明確な根拠の乏しい議論に基づいている。また、その派生のプロセスがあまりに複雑すぎて、一般性に欠ける。

以上、ここまで接語(代名詞目的語)をめぐる先行分析を見て、その問題点を指摘した。この論文では、Trips (2002)とMiyashita (2004, 2005)の指摘する北部と南部の違い、Kemenade (1987)の仮定する、V2に関わる主語接語と目的語接語の相違等の考えを参考に、また従来私が研究して来た副詞の特徴の一つである、現代英語に見られる格隣接効果と、仏語に見られるI'-制限との観点から、中英語におけるV2を中心に、接語や副詞との関係を今一度考え直すことにより、より包括的な説明をしたいと思う。

3. 提案

ここでは、まず格隣接効果やI'-制限といった副詞に関わる現象の説明原理として、Chomsky (2000, 2001) のDefective Intervention Convention (DIC : 欠如要素介在制約) を導入し、そのメカニズムが接語にも働くとは仮定する。また、英語史におけるV2現象や接語構造にも言及する。

3.1 格隣接効果とI'-制限

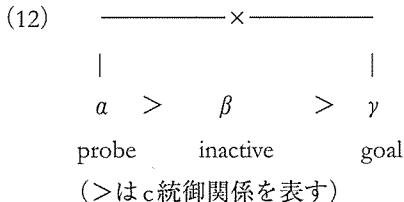
Abe (2007) では、副詞と接語の類似性に基づいて、Chomsky (2000, 2001) のDICを用いて、英語と仏語における格隣接効果とI'-制限の相違を説明した。Abe (2009) では、さらに精密化して、副詞も接語も共に中立の ϕ 素性を持つとは仮定し、初期中英語における格隣接効果とI'-制限の現象を考察した。

(11) The Defective Intervention Convention

In structure $a > \beta > \gamma$, where $>$ is c-command, β and γ match the probe a , but β is inactive so that the effects of matching are blocked.

(Chomsky (2000, p. 123))

これを図式的に表わすと次のようになる。ここで、probeである a が素性照合のため、matchするgoalを探すが、その際に、同じc統御領域内でより近くてinactiveなgoalの β が介在するために、 a と γ のAgreeが阻止されるというものである。



DICの有効性について、Chomsky (2000, p. 129) では、この制約の効果として、次のような例が挙げられている。

(13) *XP T-seem that [it was told friends CP]

$$\begin{array}{ccc}
 P(\alpha) & (\beta) & G(\gamma) \\
 [u\phi][EPP] & [+ \phi] & [\text{Case}] [+ \phi][\text{Case}] \\
 | \text{—————} \times \text{—————} |
 \end{array}$$

ここでは、DICに基づいて、主節のTがprobe(α)となり、goal(γ)がfriendsとなるが、間に介在する β であるitが、 γ をc統御し、且つ ϕ 素性を持つため、それが阻止要素として働いて、主節のTとfriendsとのAgreeを阻止する。その際、 β であるitは、既に格素性が照合されていて、inactiveになっていると仮定される。またChomsky (2000, p. 128) では、wh島制約に関しても、DICが有効であるとしている。(例省略)

加えて、西岡 (2007, pp. 130–131) では、否定表現に対してもDICが有効であるとしている。

(14) *Anyone did not attend the party.

$$\begin{array}{c}
 [PolP Pol_{[nNEG]}[EPP][TP NPI_{[+NEG]} T NE_{[[+NEG][uneg] \dots}]] \\
 | \text{—————} \times \text{—————} |
 \end{array}$$

この構造で、PolPとは否定のスコープを表すためにTPの上に投射されていると仮定される。また、NPI (negative polarity item : 否定極性表現、ここではanyone) はunegを持たないため、inactiveであると仮定される。すると、この構造では、否定要素(not)とPolとの経路の間に、inactiveなNPIが存在する為、DICによってAgreeが阻止されると仮定される。

以上のように、DICを用いることによって、いろいろ広範囲な言語事実を説明できることが分かった。そこで、そのメカニズムをさらに接語や副詞までも拡大することによって、従来十分に説明できなかった言語事実を、より理論的に説明できることを示す。

次に、副詞と接語が持つ中立の ϕ 素性について説明する必要があると思う。ここで言う中立の ϕ 素性とは、まだ完全な ϕ 素性になっていない状態を指し、その限りでは、 ϕ 素性を持つ場合と ϕ 素性を持たない場合のどちらにもなりえる状態と考える。素性照合の際に、強い特性を持つ α がprobeの場合には、間に中立の ϕ 素性を持つ β という要素が存在しても、 α にとって有利に解釈でき

ると仮定する。すなわち、中立の ϕ 素性とは ϕ 素性に関して未指定であり、この場合阻止要素としての要件は ϕ 素性を持つことであるが、少なくともこの段階では β が ϕ 素性に対して未指定なので、 ϕ 素性を持たない可能性がある。そこで強い素性を持つ a がprobeの場合には、有利な解釈として β が阻止要素としての要件である ϕ 素性を持たない可能性を許す。したがって、 β は ϕ 素性を持たず、阻止要素とならないと仮定して、 a は β を越えて γ との照合が可能となる。一方、弱い特性を持つ a がprobeの場合には、間に中立の ϕ 素性を持つ β があると、 β は ϕ 素性に関して未指定であるが、弱い素性を持つ a がprobeの場合には有利に解釈することができないので、 β の阻止要素としての要件である ϕ 素性を持つ可能性を許す。したがって、この場合 β は ϕ 素性を持って、阻止要素になると仮定して、 a は β を越えて γ との照合は阻止されることになる。

そこでまず、現代英語に見られる格隣接効果を考察し、次に仏語に見られるI'-制限を考察する。まず格隣接効果から見てみよう。

- (15) a. John *quickly* hit the dog.
 b. *John hit *quickly* the dog.
 c. John hit the dog *quickly*.

例えば、(15b)に対して、次のような構造を仮定する。

- (16) John [_{NP} hit quickly the dog]
 P(a) β G(γ)
 |_____ × _____|

この構造において、probeである動詞のhitは、副詞のquicklyをc統御し、またquicklyはgoalである名詞のthe dogをc統御している。副詞は中立の ϕ 素性を持つが、一方名詞は完全な ϕ 素性を持つと仮定する。² 現代英語における動詞は、弱いV素性を持っていると仮定されるので、副詞の持つ中立の ϕ 素性を、名詞の持つ完全な ϕ 素性と同一なものとし、副詞を阻止要素と判断し、DICに基づいて、(16)は非文法性を示すことになって、現代英語の格隣接効果が説明される。図式で表すと次のようになる。

- (17) 現代英語： V Adv NP
 弱V：φ素性 中立φ素性⇒φ素性 φ素性
 |————— × —————|

一方、類似の EME の例を見て見よう。

- (18) þiss iss to seggenn *opennlig* þe Laferrd Cristess karrte.
 this is to say openly the Lord Christ's deed
 'this is to say the Lord Christ's deed openly.'

(CMORM, PREF L51.82)

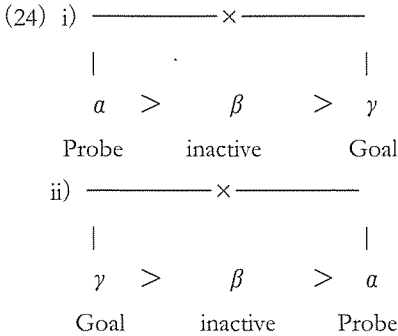
(18) は (15b) と類似で、副詞が動詞と目的語との間に介在しているので、現代英語と同じならば、格隣接条件に抵触するはずである。しかし、(18) のような例が存在するという事は、EME においては格隣接効果が示されなかったのではないかと考えられる。EME においては、動詞は強い V 素性を示すと仮定されるが、一方現代英語では動詞は弱い V 素性を示すと仮定される。動詞が強い V 素性を持ったり、弱い V 素性を持ったりするのは、決して恣意的なものではない。EME においては、動詞は豊かな形態を持ち、(V2 などに見られる) 動詞移動の性質を持つことから、強い V 素性を持つと仮定される。一方、現代英語における動詞は、形態的区別をほとんどなくし、もはや移動する性質を失ったと仮定されるので、弱い V 素性を持つと仮定される。すると、問題の (18) は、その構造は (16) と類似であるが、働くメカニズムが異なっていると仮定する。

すなわち、EME における動詞は強い V 素性を持っているので、(19) の構造では、β 位置にある副詞の持つ中立の φ 素性を、φ 素性ではないと解釈して、副詞は阻止要素とならないので、DIC に違反せず、動詞は名詞との照合が可能となる。したがって、これにより EME における格隣接効果がないことが説明される。

- (19) þiss iss [_{VP} to seggenn *opennlig* þe Laferrd Cristess karrte]

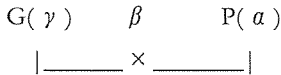


これを図式で表すと次のようになる。

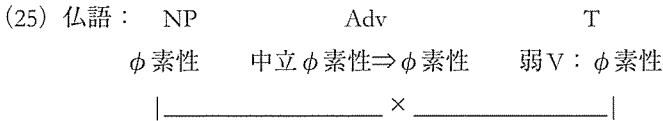


すると、(22) の構造は、まさに (24ii) に合致する。

(22') $[_{TP} \text{Jean}_i \text{probablyment a fait}]_{vP} \text{ } \neq \text{ } [_{\text{plusier}} \text{erruers}]$



この構文では、goalであるJeanが、副詞 (probablyment) である介在子をc統御し、副詞はprobeであるT-V- $\nu(a)$ をc統御しているのので、ここでDICに抵触する環境が作られると仮定する。仏語の動詞は移動を行い、形態も豊かなので、動詞は強いV素性を持っていると仮定される。しかし、英語のような法助動詞を確立していないので、Tは弱いV素性を持つと仮定する。⁴ そして、(22') の素性照合は νP の上のphaseであるCPで行われると仮定され、弱いV素性を持つ新たなprobeのTは、副詞の持つ中立の ϕ 素性を、名詞の持つ ϕ 素性と同一のものと解釈して、(22') を非文と判断し、これによって仏語のI'-制限が説明される。これを図式的に示すと、次のようになる。



一方、英語の場合はどうか。(21b) に見られるように、明らかに正しい文である。Abe (2009) では、現代英語に見られる法助動詞の存在に着目し、英語の法助動詞は、一般動詞と異なり主語との倒置を行うなど、移動の性質を持っているので、いわば強いV素性を持っていると仮定した。また、このT位置には、法助動詞の他、have/beやdummyのdoが現れると仮定する。(have/beは

移動すると仮定する。)すると構造は、(22')と類似しているが (ModPを想定する必要もあるかもしれない), T位置にある probeの hasは強いV素性を持つので, 副詞 (probably) の持つ中立の ϕ 素性を, ϕ 素性ではないと判断して, 副詞は阻止要素として解釈されず, DICに違反しないことになり, (21b) が許されることになる。よって, 現代英語における I'-制限がないことが説明される。これを図式的に表すと次のようになる。

(26) $[_{TP} \text{John probably has}] [_{VP} \text{ } t_i \text{ made several mistakes}]$

$G(\gamma) \quad \beta \quad P(\alpha)$

|____○____|

(27) 英語: NP Adv T

ϕ 素性 中立 ϕ 素性 \Rightarrow ϕ 素性なし 強 V: ϕ 素性

|_____○_____|

いままでは, もっぱら副詞に関してDICを用いてきたが, そのメカニズムをさらに接語にまで拡大して, 中英語期における変化を説明したいと思う。

Pintzuk (1993)によると, OEにおいては, 時制の主動詞の来る構造で, 動詞の後に来る代名詞目的語や副詞の頻度が, (動詞の後に来る)不変化詞よりも頻度が低いと指摘 (123例中7例 (5.7%))。これは, 動詞の前に来る代名詞目的語 (=接語) や副詞は句範疇に付加するため, VPから左方移動されるのに対し, 不変化詞は基底の位置に残り, 左方移動できないからであるとしている。

Pintzukの指摘は, OEに関するものであるが, 接語と副詞を同列に扱っているので, その考えを中英語期にも延長できると仮定してみよう。

そこで, 接語は副詞と同様, 中立の ϕ 素性を持つと仮定する。一般に (軽い) 副詞や接語が, 主語と動詞の間に来ることができるのは, 音声的にも意味的にも軽いからであると考えられる。しかし, 例え副詞と接語が, 中立の ϕ 素性を持つ点で同様であるとしても, 接語は名詞と同様に, 格や θ 役割に関わる点で, 副詞よりもいっそう動詞と緊密な関係があると思われる。ここでは, そういった副詞と接語の類似点と相違点を考慮しながら, 論を進めて行きたいと思う。

3.2 接語構造と V2 構造の共謀

次に、副詞の場合に見て来た DIC が、どのように接語の場合にも当てはまるのかという分析に行く前に、まず接語構造と V2 構造との関係について、考察したいと思う。

一般に V2 言語では、動詞が第二位置に来て、第一位置には、いわば話題化された要素として、主語以外にも目的語や前置詞や副詞などが来ることができ
る。⁵

- (28) a. Diesen Roman las ich schon letztes Jahr. (ドイツ語)
 this book read I already last year
 b. Schon letztes Jahr las ich diesen Roman.
 already last year read I this book

(Battye & Roberts (1995, p. 18))

一方、接語に関わる現象としては、Wackernagel position と呼ばれる統語上の位置に関する現象がある。これは、接語を持つ言語は、V2 言語と同様に、第二位置が特殊性を持ち、この位置に接語が来ることが要請され、第一位置には、主語、目的語、動詞、副詞など様々なものが現れる。したがって、これらも一種の話題化と考えられる。例えば、Renzi (1989) によると、セルボ・クロアチア語では、前に何が来ようが、常に文頭から二番目に接語が来るとして
いる。

- (29) a. Taj *mi* pesnik čita knjigu danas
 that me poet reads book today
 b. Taj pesnik *mi* čita knjigu danas
 that poet me reads book today
 c. Čita *mi* taj pesnik knjigu danas
 reads me that poet book today
 d. Danas *mi* taj pesnik čita knjigu
 today me that poet reads book
 e. Taj pesnik *mi* čita danas knjigu
 that poet me reads today book

(Renzi (1989, p. 362))

これに関して Hopper & Traugott (2003, p. 144-5) は、次のように言っている。『第二位置の傾向は、話された文が典型的に持つ topic-comment structure (話題・評言構造) であり、多くの発話においては、始めの句 (話題) が、それについて言われるもの (評言) に対して、あたかも set the stage for (お膳立て) をしているように見える。但し、それと同時に気づくべきことは、第二位置が必ずしも第一語に、焦点の注意を向けているとは限らない。しばしば文の不変化詞に対して単なる確立された位置になっている場合がある。』

以上、ドイツ語における第二位置を占める動詞の例 (28) とセルボ・クロアチア語における第二位置を占める接語の例 (29) の共通性が、話された文の持つ話題・評言構造の反映であるということを見てきた。また、Hopper & Traugott (2003, p. 145) によると、Wackernagel 自身も、代名詞と動詞が文において第二位置を好むことに気づいていたと指摘しているので、ここで V2 と接語を結びつける議論は、あながち的外れではないと思われる。

V2 現象に関しては、ここでは Platzack (1995) に基づき、C が定性素性 [+F] を持つため、動詞は C まで移動すると仮定する。そして、CP の指定辞位置に話題化の要素が来ることによって、動詞の第二位置が保証されることになる。そこで接語に関しても同じようなメカニズムが働くと仮定する。ここでは V2 の定性素性 [+F] に対応するものとして、Wackernagel position を要求する素性として [+W] を仮定する。この素性は、[+F] の場合と同じように、C の主要部にあると仮定し、それによって [+W] を持つ構造は、V2 の場合と同様に、CP の指定辞位置に話題化の要素が来ることによって、接語の第二位置が保証されることになる。このことにより、C の主要部に [+F] または [+W] が来るという違いはあるものの、CP の指定辞位置に話題化の要素が来ることになるので、これによって V2 構造と接語構造の類似性が捉えられることになる。そして、両者の構造は共に、話題・評言構造を表すことになる。

(30) a. Verb Second (V2): [_{Spec, CP} XP [_C V [+F]]...

b. Wackernagel Position: [_{Spec, CP} XP [_C cl [+W]]...

次に OE について考えてみよう。OE は V2 を示すと共に、接語も有すると考えられる。その結果、OE では、第二位置に代名詞要素 (= 接語) が来ると、

V2が破られることが, Kemenade (1987) において, 既に言及されている。

- (31) a. *Æfter his gebede he ahof þæt cild up*
 after his prayer he lifted the child up
 b. *das þing, we habbað be him gewritene*
 these things we have about him written
 c. *Fordon we sceolan mid ealle mod & mægene to Gode gecyrran*
 therefore we shall with all mind & power to God turn

(Kemenade (1987, pp. 110-111))

しかし, 上で見たV2構造と接語構造の観点から今一度見直して見ると, この構造は, V2を破っているというよりは, むしろV2と接語化が共存していると仮定することができる。すなわち, この構造では, V2を要求する[+F]と接語を要求する[+W]が共にCに現れたために, その位置で動詞と接語は共存していると仮定される。つまり, 接語が動詞に接語化されることにより, 動詞全体が第二要素を示すと仮定される。すなわち, CP構造は, 次のようになっていると仮定される。(接語が動詞の前に来るか, 後に来るかは言語による。)

(32) V2 + Wackernagel: [_{Spec, CP} XP [_C cl + V [+W][+F]]...]

すると, この構造は, V2とWackernagel positionの両方を満たし, 決してKemenadeの言うように, 接語が来るとV2を破ることはない。

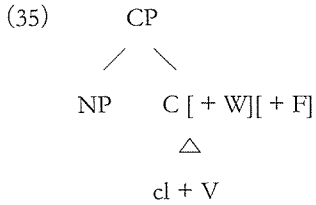
以上のことを背景にして, もう一度接語を含むEMEの例を見てみよう。

- (33) & *icc iŋ hafe forþedd te,*
 and I it have completed you
 ‘and I have completed it for you,’ (CMORM, DED. L23.8)

ここでは, 上での分析にしたがって, 接語と動詞は, それぞれ[+W], [+F]の要請を満たすために, Cへ移動すると仮定する。

(34) [_{CP} icc_i [_C [itt_i + hafe_k][+W][+F][_{TP} t_i t_k [_{VP} t_i [_{VP} t_k forþedd t_i te]]]]]

この構造がDICの入力になると考えてみよう。すると, (34) は次のような図式になる。



この構造では、goalであるNPとprobeであるV(C)との間に接語が生じていて、一見するとDICの構造に抵触しているように見える。⁶しかし、NPはclをc統御はしているが、clはVと一体化しているので、clとVとの間にはsister関係が成立せず、したがってc統御の関係にもならないと考えられる。よって、この構造はDICに抵触することなく、許されることになる。⁷

その後、英語はLME期に入り、V2と接語の消失を経て、もはや(35)のような構造を提示しなくなる。一方、仏語の場合には、英語と同様にV2はなくなるものの、接語は残るので、I'-制限をめぐる副詞と接語の違いは、そのまま引き継がれると考えられる。

多くのV2言語ではV2が起こるのは主節に限るが、アイスランド語やイディッシュ語では、主節にも埋め込み節にもV2が起こるので、この違いは、[+F]が主節だけ(多くのゲルマン語)か、それとも埋め込み節でも生じる(アイスランド語、イディッシュ語)かによって区別される。また、この論文の始めで触れた(1)のKemenade(1987)の指摘にもあったように、目的語接語が消失するのは1200年頃から、V2が消失するのは1400年頃、主語接語が完全に消失するのは1400年頃とされている。これを説明するためには、目的語接語に対しては[+W(o)]、主語接語に対しては[+W(s)]を仮定すれば、1200年頃に[+W(o)]が消失し、1400年頃に[+F]がCからIに移動し、続いて[+W(s)]も消失すると思えば説明可能である。しかし、主語接語と目的語接語との関係については、より詳しく研究する必要がある。

最後にもう一度、話題化の構造について考えて見よう。Hopper & Traugott(2003)の指摘が正しいとすると、topic-comment(話題・評言)という認知構造において、第一要素に来るものは、話題となる要素であり、第二要素である動詞や接語は、その評言(の一部)と考えられる。したがって、V2や接語化

はその話題を際立たせる操作とも考えることができる。しかし、なぜ中英語期になって、そういった話題を際立たせる V2 や接語化という操作がなくなったのだろうか。一つ考えられることは、文法における経済性の考えである。つまり、V2 の消失を考えた場合、定性素性の [+F] が C から I へ移ったという仮定は、動詞移動の観点から見ると、従来の V2 の場合には、動詞が V から C へ移動していたものが、V2 の消失に伴い、英語では顕在的な動詞移動がなくなる点で、より経済的になったと言える。また、接語の消失は、文字通り C において [+W] がなくなったことにより、余分な接語を仮定する必要がなくなった分だけ、より経済的になったと仮定できる。

また文法化の観点からすると、例えば Roberts & Roussou (2003) では文法化を上方への変化と仮定している。V2 の消失は、定性素性の [+F] が C から I へ移ったとすると、その変化は下方への変化であり、また接語は C そのものから消えるので、これは、Roberts & Roussou (2003) の定義からすると文法化とは逆方向（接語の場合にはその方向性すらなくなる）なので、言いかえると、これらは文法化しなくなる、つまり脱文法化のプロセスと考えられる。

このように考えると、V2 の消失とは [+F] の指定が C から I へ移った結果という一見恣意的に見える Platzack の主張は、経済性及び文法化の観点から捉え直すことができる。また Miyashita の接語の消失を単なる uCl の消失とする恣意的な主張も、英語がより経済的な選択として、接語を消失したと仮定するか、または脱文法化の過程であると考えることができる。

4. まとめ

本稿では、英語（中英語と現代英語）と仏語における、副詞と接語に関わる格隣接効果と I' -制限における振舞いの違いを、DIC というメカニズムを仮定して説明を行った。

また V2 と接語の消失に関しては、V2 の消失とは、V2 を要求する定性素性 [+F] が C から I (= T) への移行によって、顕在的な動詞移動をしなくなった過程であり、接語の消失とは、接語の第二位置を要求する C の持つ [+W] の消

失に伴って、その特別な地位も消失したと仮定される。この変化は、経済性の考えからすると、動詞の場合は顕在的な移動をしない点で、より経済的となり、また接語といった余分な要素を仮定しない分、英語は経済的になったと仮定できる。また Roberts & Roussou (2003) に基づく文法化の定義によれば、V2や接語の消失は、上方への変化ではないので、いわば脱文法化のプロセスと考えられる。

*この論文の草稿の段階で、柳朋宏氏と登田龍彦氏から貴重なご教示を頂いた。ここに感謝の意を表します。また匿名の編集委員3名の方からも貴重なご教示を頂いた。ここに感謝の意を表します。

注

1 Chomsky (1995) は、理論の発展によって、それまでの格隣接効果を示す原理がなくなったことから、従来の隣接性を導くために、彼の Bare Phrase Structure という、従来の X-bar 理論を不要とする考えの下で、副詞を項と考えることにより、その効果を出そうとしている。

(i) $[_{VP1} \text{John} [_{V_1 V} [_{VP2} \alpha [_{V2} \text{reads } \beta]]]]$

この構造で、もし副詞が α として選択され、NP が β として選択されると、派生は破綻 (crash) する。つまり、NP は格素性の照合を受けるために、非顕在的レベルで動詞の照合領域へ移動する必要があるが、目的語の素性は、近接性の要件に基づいて、もっとも近い照合位置へ移動する必要があるが、ここで VP_2 の指定辞の位置に副詞が存在すると、その位置がもっとも近い照合位置なので、それを越えて移動すると近接性の条件に抵触し、目的語の素性が照合されず、派生は破綻することになる。これによって、次の文の非文法性が説明される。

(ii) *John reads *often* books.

しかし、この分析は誤って仏語の同様の例も、非文であると予測してしまう点で問題がある。

(iii) John embrasse *souvent* Marie.

一方、Costa (2004, pp. 724-6) では、接語と副詞について、ヨーロッパ・ポルトガル語における分布の類似性を述べている。

(iv) 接語 : *Eu o vi./Eu vi-o.

I him saw/I saw him

(v) 副詞 : *Eu la estive./Eu estive la.

I there was /I was there

2 Chomsky (2000, 2001) では、DICにおいて β が阻止要素となるためには、 ϕ -complete でなくてはならないと仮定している。そして、ここで考える格隣接効果を説明するためにDICを用いるとすると、副詞が目的語と同じ素性を持つと考えられる。副詞が ϕ 素性を持ちうる可能性に関しては、Napoli (1975) に指摘されている。彼女によると、イタリア語のある副詞 (svelto) は、人により照合されると考えられる。但し、かなり話者によって異なることも指摘されている。

例えば、次の例では、副詞が主語と agree している。

(a) Maria parla svelta/svelto.

f.s. f.s. um.

(f.s. = feminine, singular, um. = unmarked)

'Mary speaks fast.'

(Napoli (1975, p. 414))

類似の例として、次のようなものが挙げられている。

(b) Maria cammina lesto/lesta/lento/lenta.

'Mary walks fast/slow.'

(c) Gli anni passano veloce/veloci.

'The years past fast.'

(d) La rondine vola alto/alta/basso/bassa.

'The swallow flies high/low.'

(e) L'auto costa caro/cara/salato/salata.

'The car costs a lot.'

(f) Gli uomini vanno lontano/lontana.

'The men are going far away.'

(Napoli (1975, p. 418))

これらの例に見られるように、副詞が ϕ 素性を持つのは必ずしも義務的ではないが、 ϕ 素性を持つ可能性があることは確かなようである。

また ϕ 素性の定義について、Chomsky (1981, p. 330) では、項 (名詞) が持ちうる、人称、数、性、格を含めて、 ϕ 素性と呼んでいるので、ここではその考えを採用して、 ϕ 素性の中に格素性を含めると仮定する。

3 DICの逆方向の適用に関して、例 (22) に即して考えると、主語が vP からTPへ移動するのは、EPP素性の照合のためと仮定される。すると、主語は既に照合

されているので、DICを適用できないのではないかという疑問が生ずる。しかし、EPP素性とは、構造に関わる特性であり、主語と動詞といったAgree関係には、もっぱら人称、数、性、格といった語彙特性が関わると考えられる。したがって、主語と動詞のAgreeの場合には、例え主語が移動によってTのEPP素性が照合されたとしても、主語のそのものの語彙特性は照合されていないので、DICにはactiveな要素として、適用を受けると仮定する。

4 EMEでは、Tが弱いV素性を持つが、Vは強いV素性を持つので、overt syntaxの段階で、動詞はTへ移動する。現代英語の場合には、Tが強いV素性を持つが、Vは弱いV素性を持つので、overt syntaxでは動詞はTへ移動することができず、代わりに強いV素性を持つTは、助動詞などによって語彙的に実現されると仮定する。仏語は、状況的にはEMEと類似していると仮定。

5 ここでは、話題化される要素として前置詞や副詞が挙げられているが、これらを話題化された要素と考えるには抵抗があるかもしれない。しかし、ここで考えている話題・評言構造は、別の情報構造の考えからすると、背景・前景構造とも言える。すると、文頭に来る前置詞や副詞は、背景となって情報構造を構成して、広い意味の話題・評言構造を成すと仮定できると思う。

6 ここでは、接語が主語と動詞の間に来て許されることを、DICを用いて説明しているが、これをEPPに関連づけて説明することはふさわしくないと思う。その理由の一つとしては、V2言語では、第一要素には主語以外に目的語や前置詞などが来ることができたからである。(本文の例(28)参照)

7 一見すると、ここでの動詞と接語が共に第二位置を占めることに対する反例は、文頭にwh疑問詞やpaや否定辞が来て、接語が動詞の後に来る場合である。

(i) a. [Q for hwam] [v noldest] [pron þu] te sylfe me gecyðan þæt

for what not-wanted you you self me make known that

b. [Adv þa] [v foron] [pron hie] mid þrim scipum ut

then sailed they with three ships on

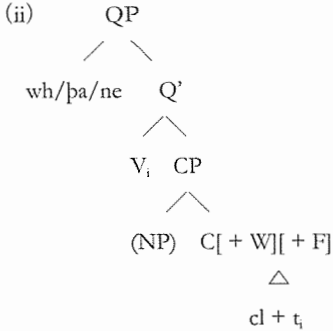
c. [Neg ne][v sceal][pron he] naht unaliefedes don

not shall he nothing unlawful do

(Fisher, Kemenade, Koopman & Wurf (2000, p. 118))

しかし、これらの構文は、明らかに通常の話題化の構造とは異なり、演算詞や否定辞などが文頭にきて、動詞がそれに伴って移動しているように見える。そこで、この構造は、いわば数量詞構造として、CPの上にQPがあると仮定する。すると、その構造は次のように表わされることになる。ここでは、演算詞や否定辞は、QP

の指定辞の位置に来て、動詞はQPの主要部を占めると仮定される。



したがって、この構造では、演算子や否定辞を解釈するため、動詞はCPからさらにQPに上昇するが、その痕跡は、Cの主要部で、接語と一体をなし、それぞれ [+W], [+F] を満足しているので、接語が第二位置を占めないのは、表面上のことに過ぎない。(尚、この構造がV2構造とは、別物である証拠としては、その後、V2を消失した現代英語においても、演算子が文頭に来る場合には、(助)動詞がそれに続いて第二位置に来るが、これはV2の要請よりも、演算子の要請と仮定される。

(例) What do you think?)

参考文献

- Abe, Koichi (2007) "“Against Maetzawa’s Linearization”: The Relation Between the Case-Adjacency Effect and the I'-Restriction in English and French," *Exploring the Universe of Language, A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday*, Department of English Linguistics, Nagoya University.
- Abe, Koichi (2009) "A historical consideration around the Case-Adjacency Effect and the I'-Restriction during Early Middle English," *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics*, Nagoya University
- Battye, Adrian & Ian Roberts (1995) (eds.) *Clause Structure and Language Change*, Oxford University Press, New York.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquires: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger

- Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 98-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Costa, João (2004) "A multifactorial approach to adverb placement: assumptions, facts, and problems", *Lingua* 114, No. 6, 711-754.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kemenade, Ans van. (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris Publications, Dordrecht.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, Second Edition, Cambridge University Press, New York.
- Hulk, Aafke and Ans van Kemanade (1995) "Verb second, pro-drop, functional projections and language change", in Battye & Roberts eds. (1995) 227-256.
- Miyashita, Harumasa (2004) "Cliticization in the History of English: Loss of the Subject Position Asymmetry and the Wackernagel Pronominal Object," *Linguistic Research* 20, 103-154.
- Miyashita, Harumasa (2005) "Some Observations on the Displaced Personal Pronoun Complement to Preposition in Middle English," *The World of Linguistic Research: A Festschrift for Kinsuke Hasegawa on the Occasion of His Seventieth Birthday*, Kaitakusha, Tokyo.
- Napoli, Donna Jo (1975) "A global agreement phenomenon," *Linguistic Inquiry* VI, 3, 413-435.
- 西岡宣明(2007)「英語否定文の統語論研究—素性照合と介在効果—」くろしお出版, 東京.
- Pintzuk, Susan (1993) "Verb seconding in Old English: verb movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, 5-35.
- Platzack, Christer (1995) "The Loss of Verb Second in English and French," in Battye, A. & I. Roberts, eds. (1995), 200-226.
- Renzi, Lorenzo (1989) "Two Types of Clitics in natural Languages," *Rivista di Linguistica* 2, 355-372.
- Roberts, Ian & Anna Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, New York.
- Tomaselli, A. (1995) "Case of Verb Third in Old High German," in Battye, A. & I. Roberts, eds. (1995), 345-369.

Trips, Carola (2002) *From OV to VO in Early Middle English*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Synopsis

Adverbs and Clitics and V2

Koichi Abe

The relation between the loss of the Verb-Second Phenomenon (= V2) and the loss of clitics has been studied in a lot of literature, but this relation has never been explained by referring to the relation between clitics and adverbs. Chomsky (1995) and Costa (2004) suggested that there is some relation between objects and adverbs. Therefore, we would like to consider the English change around V2 deeply by exploring the relation between clitics and adverbs.

Based on the similar behavior between clitics and adverbs toward the Case Adjacency Effect and the I-Restriction in Middle English, Abe (2007) suggested that we can explain this similarity by using Chomsky (2001)'s Defective Intervention Convention. Their similar behavior was explained further by the hypothesis that they have a neutral ϕ -feature in common in Abe (2009).

In this paper, we would like to sharpen the idea that was suggested in Abe (2009) and to extend it to include the Verb-Second Phenomenon. Platzack (1995) explained V2 by suggesting that there exists the finite feature [+F] in C, which triggers V2. This creates a structure where a topicalized element comes first at [Spec, CP] and a verb comes second at the head C. If we look at a sentence with a clitic, we notice that its structure is similar to the V2 structure, where a topicalized element comes first and a clitic comes second. This is called the Wackernagel position.

Hopper & Traugott (2003) said that the tendency for the second position reflects the topic-comment structure that they have, that is, the first element (topic) behaves as if it sets the stage for the comment. In view of the similarity between the V2 structure and the Wackernagel position, we will suggest that there also exists the Wackernagel position feature [+W] in C, which triggers a structure where a topic element comes first at [Spec, CP]

and a clitic comes second at the head C.

If we look over the history of English, Early Middle English (EME) is suggested to observe the Verb-Second Phenomenon. If a clitic appears, it seems to violate V2. However, we suggest that this sentence does not violate V2, because it manifests the double requirement at C by [+ F], [+ W]. After EME, English loses clitics and V2. If we see these changes from the viewpoint of economy, the losses of V2 and clitics are considered to become more economical. Seeing from the point of grammaticalization based on Roberts and Roussou (2003), they are against grammaticalization, that is, they are considered to be processes of degrammaticalization.